ごあいさつ

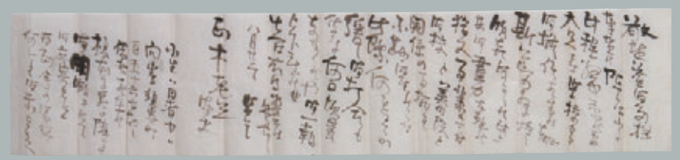
本年は岡倉天心が代表的著作『茶の本』を出版してちょうど100年目に当たります。福井県は、岡倉天心ゆかりの土地であることから、これを記念していくつかの事業を行い、本展もこの記念事業の一環として開催されます。本展では、館蔵品から『茶の本』初版本や天心書簡、天心にゆかりの深い作家たちの作品等約30点を展示すると共に、館外からも、平櫛田中作「天心先生像」（木彫）、『支那旅行日誌』、天心所用の茶道具類、天心着用の羽織・袴、各国語に訳された『茶の本』など約30点を出展し、総数約60点で『茶の本』の魅力を中心に、天心の業績や思想を紹介いたします。最後になりましたが、今回の企画に対してご理解とご協力を賜りました関係各位に心より御礼申し上げます。

平櫛田中作「天心先生像」
日本美術院蔵

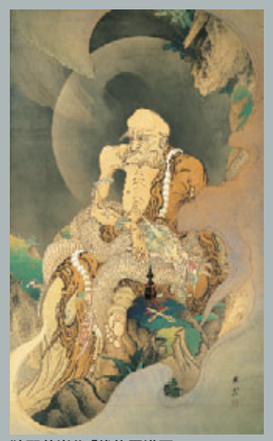
岡倉天心について

近代日本美術の先駆者岡倉天心は、福井藩士岡倉勘右衛門の次男として1862（文久2）年横浜に生まれました。天心は幼名を角蔵（覚蔵）といい、早くから英語を習得していたといわれます。13歳で東京開成学校（のちの東京大学）に入学し、在学中にアメリカ人お雇教師アーネスト・フェノロサに強い感化を受けました。卒業後は文部省のエリート官僚として働きながら、フェノロサと共に日本の古美術の発掘や保存に情熱を捧げると共に、新しい日本画の創造を提唱します。1885（明治18）年には、フェノロサ、狩野芳崖らと共に美術学校創立を目的とした図画取調掛の委員になり、1887（明治20）年には東京美術学校が創立されます。さらに1889（明治22）年には、帝国博物館理事および美術部長に就任し、翌年には東京美術学校の2代目校長となるなど、若干20代にしてまさに日本の美術界の頂点に立ち、日本における美術行政、教育、思想に大きく貢献しました。

しかし1898（明治31）年には天心排斥運動により美術学校を辞職。これに殉じた橋本雅邦、横山大観、菱田春草らと共に同年東京・谷中に日本美術院を立ち上げました。その後天心は、様々な活動をしながら長期にわたりインドやアメリカを旅し、このような中で請われてボストン美術館のために働くようになり、1910（明治43）年にはボストン美術館中国・日本美術部長に就任します。またその傍ら『東洋の理想』、『日本の覚醒』、『茶の本』などを執筆し、欧米における日本・東洋の文化思想の普及に大きく貢献しました。しかしこの間美術院の活動は徐々に低迷し、1906（明治39）年には美術院を茨城県五浦（いづら）に移して再起を図りましたが、その努力は実らぬまま健康を害し、1913（大正2）年に静養先の新潟県赤倉で亡くなりました。



岡倉天心書簡（東京美術学校長正木直彦宛）福井県立美術館蔵



狩野芳崖作「伏龍羅漢図」
福井県立美術館蔵

菱田春草作「落葉」福井県立美術館蔵

木村武山作「花鳥図（日盛り）」福井県立美術館蔵

天心と福井との関わり

天心と福井との関係は両親に始まります。両親はともに福井県出身で、父岡倉勘右衛門は福井藩士として、横浜で藩の特産品などを扱う貿易商「石川屋」を営んでいました。その次男として横浜で生まれたのが天心です。

天心が福井を意識するようになったのは、もちろん両親に拠る所が大きいと思われますが、それ以上に乳母つね女の存在が考えられます。彼女は幕末の志士で福井藩士であった橋本左内の身内といわれ、幼い天心に福井と左内のことを繰り返し聞かせたと伝えられています。そのためか天心自身は横浜生まれでありながら、「旧福井藩士」（自筆履歴書）、「郷里福井」（明治39年書簡）と記しており、天心の福井に対する想いには深いものがあったようです。

また旧三国町出身の彫刻家で、天心が校長を務めた東京美術学校彫刻科の教授であった山田鬼斎（1864～1901）には、天心の妹蝶子（てふ）が嫁いでいます。さらには東京美術学校の第一期生で、狩野芳崖門下の四天王と呼ばれた大野市出身の岡不崩（1869～1940）と天心の甥岡倉秋水（1868～?）の二人は、天心の要請で高等師範学校の図画教員として、毛筆画用教科書を制作するなど日本画教育の普及に努めており、福井の地と人がさまざまな形で天心の理想の実現に貢献したといえます。（上記の三人の作家の作品は本展に展示されています。）

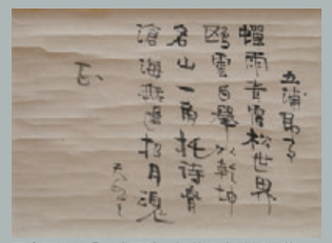
『茶の本』について

『茶の本』は、『東洋の理想』『日本の覚醒』と並んで岡倉天心の代表的著作であるだけでなく、日本の近代初期に英語で日本の文化を世界に紹介した、日本を代表する重要な書籍といえます。また『茶の本』が、初版以来世界中で多くの言語に翻訳され、現在もその出版が続いていることからも分かるように、その内容は深い思想と魅力にあふれています。天心は『茶の本』の構想を1904年の秋頃（在米中）から抱き始め、1905年初春にかけて起稿し、1906年初頭頃脱稿したといわれ、1906年の5月にニューヨークのフォックス・ダフィールド社から刊行しています。

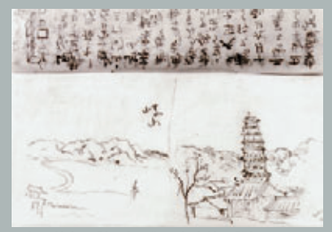
その構成は、第1章「人情の碗」、第2章「茶の流派」、第3章「道教と禅道」、第4章「茶室」、第5章「芸術鑑賞」、第6章「花」、第7章「茶の宗匠たち」の7章に分かれており、その内容は、茶道を中心に日本文化の特色を西欧に向けて説明したものです。茶の歴史、茶室、茶道の作法、茶道における花の扱いなどについて触れながら、「茶の哲学は倫理と宗教にむすびついていて、人間と自然に関するわれわれの全見解を表現している」と茶道の本質的特徴について語り、その思想的背景として、「茶道の理念はことごとく、暮らしのごく瑣末な出来事の中に偉大さを見出すという禅の考え方に由来する。道教によって美学的理念の基礎が築かれ、禅によってそれが具体化されたのである」と、禅と道教の思想を挙げています。また、「日本の茶の湯に茶の理想の頂点」があり、それは「飲む形式の理想化以上のもの」「生の術の宗教」であると、日本の茶道を東洋文明の最高到達点に位置づけています。

天心着用の羽織、袴
国立大学法人茨城大学蔵

下村観山作「馬郎婦観音像」
福井県立美術館蔵



岡倉天心作「五浦即時」福井県立美術館蔵



『支那旅行日誌』（岡倉天心自筆日記）
日本美術院蔵

天心所用の茶道具類
国立大学法人茨城大学蔵